

第 54 話< 亜ヒ焼き労働 >の要約と参考資料

第 54 話< 亜ヒ焼き労働 >の要約

亜ヒ焼きは近代の労働の中でもっとも非人間的な労働の一つでした。三筋の手拭で顔を覆っただけの姿で、致死量 0.1~0.3 グラムの猛毒亜ヒ酸を製造したのです。当然のように呼吸器を侵され、皮膚がかぶれて傷になりました。その煙が、亜ヒ焼き窯の煙突から集落へ。

第 54 話< 亜ヒ焼き労働 >の参考資料

5 4 - 1 粗製焼き

鶴野政市・クミさんの場合

木山今朝市さんの話（1979年11月7日聴取）

鶴野君は亜ヒ酸の粗製をしょった。「一人でどうこうならん」。亜ヒの製造に手が足らんから、窯の方に手を貸した。だんご作りはクミさん。窯から出して、箱につめて、くびって出す。そんな加勢をした。焼き殻はみな川に入れよった。川の魚がみんな死んだですたい。惣見の上の方にはヤマメがおるでしょう。下の方にはおらんかった。毒薬ですけねー。亜ヒ酸はとんと真っ白で、太白（たいはく；精製した純白の砂糖）みたいなもん。2人で窯に石をいれて、焼き始めたら火は消えん。年から年中焼けるですからね。二番坑の上まで煙突が立って、煙は煙突をほうていきよった。煙の行ったところの木や（不明）はみんな枯れてしもて、相当毒があつたんでしょ。焼くときは、白粉つけて、マスクを一つも二つもしよった。

政市君は若いもんで、わしが「無理するな」ちゅうのに、「こんくらのこつ」とやりよった。それが悪かつたんですな。

亜ヒ焼きは難しい。太白といっこう変わらん。食べたらおいしかろうごとあつた。焼き始めたら、石がずんずん焼ける。消えんでしょ。ずんずん焼けてしまう。粉になったのをマンガウで振るうて、その粉を16貫入りの箱に詰めよつたんです。亜ヒは重い。いま考えたら、ようやりよつたなと思うです。

甲斐市蔵・ヨリさんの場合

陳内政喜さん、フヂミさんの話（1979年4月20日聴取）

市蔵さんは五ヶ村の出身で、休山になってからは夫婦（市蔵、ヨリ）で五ヶ村に帰って二人とも死んだ。ヨリさんは喉をやられて、年中ごほんごほん、顔も何も真っ赤になつてかわいそうなごとあつた。ぜん息で。毎日、だんごづくりに行きよらした。うちの娘が、だんご固めるところへ行ってみたら、服に白い亜ヒがかかかって、ふるいよつた。

「隣のおばさんたち、タオルを口にして働きよらしたばい」ち、帰ってきていいよった。社宅の脇の窯で働いていた。市蔵さんは焼酎飲みで、一日仕事に出たら、2、3日は休んで、焼酎飲むような人じゃったから。

佐藤鶴江さんの話（1972年2月20日聴取）

大正12年ごろから、市蔵は皿ヒ焼き、ヨリはだんごづくりで働いた。昭和5年ごろまで働いて、そのあと福岡の炭鉱に行き、昭和10年頃福岡から戻ってきて、18年まで坑内とだんごづくり。

富高砂太郎さんの場合

富高タモさんの話（1977年12月聴取）

（砂太郎は）三番坑に行きよったが、二番坑の焼き方（喜右衛門）が病気になったもんじゃから、そのあとを、いっとき請負いしたもんじゃ。それまで喜右衛門の子ども（サツキ、ツギミ、カオル、袈裟喜、正孝）が出よった。

請負うちから、3、4年働いたです。粗製窯から粗砒を出して、一箱なんぼを受け取った。川田平三郎が主任で、精製の仕上げは野村弥三郎。三番坑で焼いたのは、主人（砂太郎）がいっとき職頭してみたり、焼き方したり、上下（二番坑と三番坑）で焼きよったもんじゃ。

松本常岩さんの場合

佐藤鶴江さんの話（1976年11月19日聴取）

皿ヒの監督をやらした。甲斐、鶴野さんが同じころ（昭和2年）鉱山をやめたので、そのあとの焼き方、皿ヒ専門でやった。年をとっとらした。出雲の人やったが、独身で来て、まもなく嫁をもろうた。しばらく樋の口のツボネ（いいお客が泊まる）を借りて、嫁さんに五ヶ村からフヂミさんをもろうたので、橋の東側の長屋に移った。松本さんは出雲に嫁も子もおったが、なにかの事情で嫁も子も捨てて来たんじゃろう。フヂミさんの兄弟をみな連れてきて焼きなさった。（フヂミの弟が）佐藤てつお、佐藤伝蔵（広島嫁のところで死んだ）。「かどめ」（少くく集めてやる結婚式）で、助さんが仲立ちして結婚した。南の三子さんのおる家を買って、最後は（昭和30数年ごろ）その家におらした。長男の松本ひろのりさんに、南のユキさんの子を嫁にもろた。やいとの名人でね、「ぜん息が治る」ちいうので焼いてもろうた。喉の下と脊髄の横6つずつ、やいとをすえながら、「熱いか、お産とどっちが苦しいか」と言われた。顔が曾我廼家明蝶に似とった。

私（鶴江）が16歳のときだから、昭和11年、松本さんは黒葛原（つづら）鉱山の窯築に行った。フヂミさんの兄弟を連れて行った。私の兄（友喜）も黒葛原の坑内夫に連れていかれたので覚えている。黒葛原は苦情が出たので、すぐやまった。黒葛原を最後

にやめたんじゃないかな。顔にぶつぶつができていた。あとは徳村がしよったけ。

佐藤徳蔵・シカノさんの場合

米田嵩さんの話（1978年1月29日聴取）

岩元のシカノばあさんが昭和6年～8年ごろ、松尾一男の穴で垂ヒを焼いた。まっくろになっちゃった。その嫁さん（アキノさん）も行きよったですよ。シカノさんの旦那さんは徳やんとかいう、岩戸神楽を舞う人で師匠級じゃった。だんごをつくって窯の上で乾かしたりするのを見て通りよったが、煙が臭いから長うおらずに、わしたちはとんで逃げよったです。窯の割れ目から煙がびゅーびゅー噴き出して……。アキノさんの子のイワ子さんは死んだです。長いこと入院とったが、病気はわからなかった。

佐藤イワ子さんの話（1972年2月20日聴取）

徳蔵さんが亡くなったのは、私が小学校5年生（11歳、昭和14年ごろ）のとき。病気は老衰ちゅうことやったけど、61か62で、そげん年いっとったわけじゃねえ。鉾山にはどのくらい行っとったもんか、個人の家借りて夫婦でおった。私が小学校3年のころ（昭和12年、東岸寺に）帰ってきて、1、2年おってから死んだ。だんごまるめて垂ヒ焼きたい。いちばんいかん仕事をやりよった。医者にかかったとき、「ぜん息」ち言われたごとあった。ぜん息のまま、内臓はなかったが、ゼゴゼゴいうて咳が出てくる。

シカノさんは終戦になった年じゃけ、20年の10月、73歳くらいと思う。私が18歳のとき、ばばさんが死んだ。鉾山で夫婦いっしょに垂ヒを焼き、だんごつくった。ぜん息がでて、全身がまんまるう腫れて、へそも腫れて、腫れたまま。養生のしようもなかった。えらい苦しみて死なしたもんたい。「ぜん息、ぜん息」ち、わからんちゃ、田舎の医者には。まちっと早うなんとかなっとれば。医者が言う通りして。

アキノさんも、私が学校行くころ、じいさん、ばばさんと一緒に通うた。垂ヒ焼きの仕事。4年前、63歳で、心臓が悪いとか、胃下垂とか、ぜん息の気が出て、痰に血がついて……。死んだ。おっかさんの咳が激しかったとき、あんまり激しゅうしよると血をはきよった。

みんな垂ヒ焼き行って、垂ヒをこねて、だんごつくって焼きよらした。日役がちと高かったから、それに迷らせて行っただちやな。孫、子を太らせるために行っただちやろと思うちやがな。一日、今にすれば何百円か違うちやろな。それで無理したちやがな。

シカノの妹エツ（佐藤繁太郎の嫁）も、シカノさんと同じころだんごつくりに行きよった。病気ということで、早うやめた（昭和13年ごろ）。エツはシカノより4つくらい年下。

田中今朝太郎一家の場合

田中勝さんの話（1978年6月18日聴取）

死につぶれた一家。あとは勝さんが葬った。今朝太郎は叔父になる。

田中今朝太郎 昭和 20 年 7 月 20 日死亡 50 歳

妻 シゲミ 昭和 16 年 2 月 18 日死亡 39 歳

長男 太 昭和 13 年 7 月 21 日 5 歳

長女 ケミ子 昭和 23 年 5 月 11 日 19 歳

住んでいた長屋は、樋の口の上か下。5~6 軒つづいた長屋。ずっと長屋暮らしで、今朝太郎とシゲミが仕事に出た。わたしが覚えてからは鉾山におった。みんな気管やられて、体が弱かった。

今朝太郎はいま生きちよれば 85~86 歳ぐらいなもんじゃ。土呂久やめて槇峰に行つて死んだ。家族全部死んだ。子どもたちも小さいときから社宅におつて、娘も胸をやられて旭化成に行つちよつたけど。

咳、へんな咳でな、声もなにもでらん。カサカサカサカサカサ言うような、はっきりした発言もできんようなかすれ声で。タオルでマスクするだけじゃもんね。やられるはずよ。喉をやられるのは当たり前。目もやられるからね。目はただれる。亜硫酸のそばを通るときは、息詰めて走って行くことやった。吸い込むと、それこそたいへん。

今朝太郎さんは、反射炉で働きよつた。だいぶんよかつた。煙なんかも上へ引き上げてするようになったから。原始的なのは、事務所の下手の窯で、女の人たちが働いた。構造もちごつた。女の人なんか、みんな死んじよるわ。シカノさんとか。喉がゴゾゴゾゴゾいうてから、早う死んどるわ。

5 4 - 2 精製焼き

野村弥三郎さんの場合

堀江武雄さんの話（1977 年 8 月 11 日聴取）

亜ヒ焼きから鑑別まで素人にはできない。野村さんしかできない。亜ヒ酸は真っ白でなければいけない。川田は野村さんを最後まで放さなかつた。堀江さんが土呂久を去るときまで、野村さんはいた。仕事は 5 時までやらずに 3 時頃やめていた。

野村さんは自分でも言っていた。「私は死んでも、なかなか腐らないよ」。顔が黒かつた。おカタさん（妻）だつて黒かつた。喜右衛門さんほどじゃないけれど。おカタさんも亜ヒ焼きを手伝つた。

富高暁、コユキさんの話（1979 年 11 月 5 日聴取）

野村弥三郎さんは、わたしどもが入つたとき、来ていた。精製工場もあつた。顔にいっぱいできもんができていた。野村さんの手が足らんとき、高市さんを使いよつた。

野村勉さんの話（1972 年、電話で聴取）

弥三郎の位牌：昭和11年11月2日、56歳

カタの位牌：昭和23年4月6日 66歳

鉾山へは、私が4つか5つのときに行った。大正9、10年ではなかったか。住んでいたのは窯のそばにあった鉾山事務所で、昭和5年ごろから橋のたもとの住宅に移った。昭和8年8月まで、その住宅に住んだ。風向きによって、煙がにおってきた。父弥三郎は仕上げ焼きをしていた。母カタは、人手が足りないときは、父の精製焼きを手伝っていた。

死亡診断書は憶えていない。病院の記憶もない。父の症状は結核に似ていた。咳が激しくて、医者「胸をやられている」と言った。母は肺をやられたらしく、咳き込んでいた。昭和23年に2、3か月寝込んだあと死んだ。肺結核に似た症状だった。

高木安太郎さんの場合

高木テルさんの話（1978年6月18日聴取）

夫（安太郎）は、生きとれば80いくつになります。（墓によると、昭和33年12月26日、80歳で死んでいる）佐伯の人げな。土呂久に来たときは、亜ヒ焼きが始まっとったんじゃろな。わしは、一作の妹で、あと入り。わしは5年ばかり、亜ヒかかじってくべたり、出したりしました。向土呂久の奥に反射炉という窯がありました。安太郎は夜も昼も行きよらした。夜番ちゅうのがありましたがの。安太郎は、亜ヒ焼きがきつてたまらんごとなつて、やめらしたつたいの。登りは登れんごとなつて、咳がひどかった。窯の中に入られよつたからの。

佐藤ユキさんの話（1978年6月18日聴取）

安太郎は、私の親父じゃがの。私が9歳くらいから14歳くらいまで（ユキは明治43年11月生。大正8年～13年ごろ？）亜ヒを焼いたんです。そしてところが亜砒に負けて、いっぱい顔やら体に傷ができて、たまらんというてから、2年くらい亜ヒ焼きを休んで、立宿で炭焼きをしたとです。

安太郎は、大分県の因尾（本匠村に因尾という地名がある）というところから来た。佐伯から入るらしい。おっかさんのシンが土呂久の仁戸内生まれじゃつたから、おっかさんが病気になって「生まれたところで死にたい」というので帰って来た。私たちの小さいころは炭鉾なんか歩いていた。それで、亜ヒ焼きの方へ行つたらしい。

野村さんといっしょに働きよつた。精製窯で働いた。いっぺん焼いたのを、もう一度焼くようなことをしよつたです。4、5年焼いて、2年よこうて、炭焼きやめてね、いまの向土呂久の奥に反射炉があつた。そこで焼きよつたんです。少しでもお金がとれたがいいからー。

反射炉で焼いたときは、私は結婚して。安太郎はいまのお母さんと一緒になって、子どもも小さいころでした。高木テルさんやら子どもを連れてね、反射炉で焼きよつた。

安太郎が死んだのは、もう何十年になるかな。8年くらい外に出きらんくらい。ぜん息ちいうてね。岩戸の土持医院とか佐藤医院を雇うて、注射打ってもらいよった。おなかが痛い。痰が出る。ひどいこと咳しよると、血をはいたり、肺とかじゃねえち言いよった。サロンパスを腹いっぱいはりよった。痛みが止まると咳も止まる。亜ヒ酸でやられた。腹が痛いときは、腹がはる。そうしよると、サロンパスより効くものがねえごつ貼りよった。

54-3 風呂焚き

佐保ミサさんの場合

生熊来吉「砒素の烙印」（「怨民の復権Ⅱ」）（P124～126）より

佐保さんの家は、鉾山住宅のなかでも一軒だけとびはなれて亜砒焼窯の近くにあった。（略）そのころ、土呂久川の左岸、944メートルの峰をもつ懸崖の麓に築かれた数基の亜砒焼窯から、休む間もなく毒煙が吐き出されていた。鉾山跡を見た人ならば、急斜面の灌木林にある山神さんの小さな祠を思い出すであろう。その真下のズリのうえに、佐保さんの家と共同風呂があった。そこは亜砒焼窯からわずかに50間しか離れていなかった。

茅葺きといっても、茅を10センチほどの厚さにして並べただけの粗末な屋根だった。激しい風雨に耐えられるはずがなかった。他の住宅は畳敷きであったが、ここだけは床板に茅のむしろ。土壁のかわりに、竹の横木に藁の壁。窯から家に向って吹きつける風に乗って、藁壁の隙間から煙が侵入してきた。6畳1間の家のあがりがまさに囲炉裏が切ってある。鉾山の枯れ枝を燃やすと亜砒の粉が舞い、臭い煙が立ち昇っていた。仁市さんの表現によると、その煙は「鼻がもげるような」においを発していた。大きな木をくりぬいた飲料用の水溜めに、亜砒焼の灰が容赦なく降って、山から引いた水はたちまち黄色く濁ってしまった。

54-4 妹尾河童さんの「亜砒焼き窯復元図」

川原一之著「浄土むら土呂久」P141より

舞台美術家の妹尾河童さんが土呂久を訪ねてきた。旺盛な好奇心のかたまりの河童さんは、人の覗かない所を見て回っては、細密なイラストと簡潔な文章で興味深いルポを書くことで知られる。（略）そのときは週刊朝日に連載中の「タクアンかじり歩き」の取材でやってきたのである。私が案内して土呂久に着いたとき、10人くらいのむら人が自慢のタクアン持参で待っていた。河童さんの関心はすぐタクアンを離れ、亜砒焼きの時代の話へ移っていった。「一目で窯の仕組みのわかる絵がほしいのですが……」。水を向けると、河童さんはさっそくスケッチブックをとりだした。それからが大騒ぎである。集まっていたむら人の記憶の窯を、河童さんがデッサンする。絵を覗きこんだむ

ら人が「そこは違う」「ここはこうだ」と手をとって教える。細部について、河童さんがきく。むら人の記憶はいっそう鮮明によみがえる。「この絵の通り」。1時間もかからないうちに、むら人が太鼓判を押す、みごとなでき映えの亜砒焼き窯復元図が完成した。記憶の底に眠っていた窯が、誰にでも一目でわかる絵図として姿を現したのである。

亜砒焼きの方法（妹尾河童画「亜砒焼き窯復元図」に書き込まれた文章より）

- ・焼く効率をよくするため、硫砒鉄鉱を粉にし丸くねり固めた団鉱や、砕いた鉱石は、窯の上へのせ、前もって乾かしておく。
- ・窯の上部に円形の穴があり、鉱石を落として積んだ。薪と鉱石を入れ終わると、石と粘土で閉鎖。火をつけて7日～10日間。焼くときは、（上部の）穴を鉄ぶたで閉じる。火が付くと（前部の）穴を調節。
- ・焼きあがると、この穴（側面）からもぐり込んで、全身真白になって、亜砒の粉を集めた。集砒室は3つあり、第1室は99%の高純度の亜砒がとれた。
- ・煙突にカヤの笠をかぶせた。亜砒が煙と共に出るのを防ごうとしたらしいが……。笠は亜砒の結晶で真っ白だった、と。つまり空気中に飛散していたわけだ。